自尊感情を育成する特別活動
Nurturing Self-esteem through Special Activities

水口　洋 MIZUGUCHI, Hiroshi

● 玉川聖学院
Tamagawa-Seigakuin

Keywords
自尊感情，特別活動，キリスト教学校教育
self-esteem, special activities, Christian school education

ABSTRACT

新しい学習導要領に基づく教育課程が実施されようとしている。今回の改訂では「ゆとり教育」から「学力重視」へと方向性が大きく転換された。日本の学校教育の問題は，学ぶ意欲を持てない多数の子どもたちが輩出されていることであり，それは戦後の詰め込み教育がもたらした当然の結果でもあった。「ゆとり教育」はその反省から提起された教育方法の見直しであった。しかし，この度の改訂では「学ぶ意欲」をどう育てるかが検討されずに，削減された教科内容を復活させた。日本の教育が抱えていた問題を棚上げにした改革でもあった。この教育課程の欠けを補うことが期待されるのが，「特別活動」である。自主的で創造的な特別活動の展開は，生徒の自尊感情を育成して彼らに居場所感を与える。私立学校にとって学校の独自性を生かす特別活動の活性化は重要な教育課題であり，生き生きとした学校生活を提供する鍵となるだろう。

The school curriculum in Japan is being implemented based on new curriculum guidelines. The major change is a movement away from “relaxed education”to “achievement-oriented education”. A significant problem in Japanese education is the increasing number of students who lack the motivation to learn. That is the natural result of the education style after the war that was based on learning large amounts of information by rote. A reconsideration of that style led to a new emphasis on “relaxed education”. However, the latest change is a return to learning by rote without considering its effect on motivation. The problem has been merely shelved. It is hoped that 'special activities' can compensate for this lack in the education system. Implementing independent and creative activities will create a sense of self-esteem and belonging. For private schools, in particular, the challenge is to provide activities that reinforce a private school's unique principles. That is, undoubtedly, the key to fostering a lively school life.

1．はじめに

21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため，国の教育課程全般の見直しを検討するよう，文部科学大臣が中央教育審議会に要請し，審議された新学習指導要領の答申が，2008（平成20）年1月に出された。この答申を踏まえて公示された新しい学習指導要領は，中学校で2012（平成24）年度から全面実施，高等学校で2013（平成25）年度から段階的に実施されることとなった。この度の新教育課程の方向性は，学力低下の課題に対応するための学習内容の再吟味を中心とした，目指していた「ゆとり教育」から「学力重視」に大きく舵を切った教育課程の変更であり，新教育基本法下の最初の教育課程の改訂であるが，多くの問題をはらんでいる改訂であるように思われる。

本来21世紀に向けての教育改革が目指した方向性は，全国民の「学ぶ意欲」の回復を目指す生きる力を養成する教育であり，20世紀の知識注入型の詰め込み教育から，ゆとりを持った学習環境を設定して，体験や経験を通して学ぶ力を養成しようとする方向性に進んでいたが，一連の学力低下論争を踏まえて，学習内容の増加を中心とする「学力向上のための教育課程の編纂」に変更された。従来からの問題であった「低学力層へのケア」「教育の機会の不平等」「貧困の問題」という，もう一つの問題は何も議論されずに，学力問題，現実的には成績上位三割の層をどう伸ばすかが最大の課題になるとともに，「ゆとり教育」の方向性は凋んでいった。

このような状況の中で，子どもたちの自尊感情や学習意欲，学校への帰属意識を養成するには，今まで以上に「特別活動」の果たすべき役割が大きくなっている。「学ぶ意欲」の育成には，特別活動が提示している「学校が子どもたちの居場所になっていく」ことが必要であり，特別活動を通して実現される教育的な営みは，子どもたちの健全な精神の発達にとって，欠くことの出来ないものになってきているように思われる。

この特別活動の実践は，学校の独自性を発揮する教育の根幹にかかわる課題である。子どもたちの健全な発達のためには，教科活動と共に特別活動を活性化させることが学校の果たすべき課題であると考える。昨今，日本の教育が行き詰まり状態に陥っていると指摘されるが，学校の独自性を取り戻し，学習と学校生活のバランスをどのように構築するかは喫緊の課題であると言えよう。学校の独自性はカリキュラム編成の問題であると共に，ヒドンカリキュラムである特別活動の中に隠されていることが多い。そこに光を当てることが学校教育を活性化させていく鍵であろう。とりわけ，建学の精神が明確にされている私立学校にとって，特別活動をどのように構築していくかは，学校の教育理念を浸透させる上からも重要な課題と言えるだろう。

2．教育改革をめぐって

2.1　1998（平成10）年告示の教科課程が目指したもの

豊かな社会の「水漏れ」が顕著になってきた1990年代に起こった教育改革のコンセプトは，それまでの画一的，知識偏重の学習を見直すことを基本とした改革であり，従来の教科内容では対応できない国際化，価値の多様化，情報化，地球環境問題などの課題に対する対応を目指すカリキュラム検討であった。

従来のシステムは制度疲労しているという主張はそれ以前からあり，教育改革の方向性は旧文部省の中にも強くあった。確かに画一的で中央集権的な教育システムは，グローバル化し複雑で多元的な社会のニーズに対応できなかった。また，80年代後半以降，不登校やいじめなどの学校教育の内部崩壊現象に対して，対応しきれない現実があった。人と人との関係性の断絶の中で「何のために学ぶのか」という根本的な問いに対する答えがない学校教育に対する苛立ちが，社会全体にあった。学校内部では詰め込み教育に対する反省，それに耐えられない児童・生徒の大量出現を前に改革が急がれた。その結果として「学校五日制」「ゆとり教育」「学習内容の柔軟化」「教科課

程の多様化」「総合学習の導入」，更には「卒業単位の軽減」という戦後の教育システムを抜本的に改革して，画一化，硬直化した学校教育を刷新しようという試みが，教育課程の改訂の中に盛り込まれた。

2.2　2008（平成20）年の改革

しかし，1998年に告示（小・中，高は翌年）された教育課程が実施される21世紀になると，OECD（経済協力開発機構）のPISA調査に代表される国際的な調査の分析結果を契機に「学力低下問題」が大学関係者から提起され[1]，現場の実態を検証しようともせずに「ゆとり教育に対する批判」だけが大きな時代風潮となった。文科大臣が教科課程の見直しを発言し，現場は混乱していった。

その結果，10年にわたる議論を封印して，新課程に向けての改訂が急ピッチで行われていった。そして，「新教育基本法」下の，学力重視と道徳教育重視の新課程が制定されていった。しかしながら，「小学校で3割，中学で5割，高校で7割」と言われる学習困難な児童生徒への対応は，再び置き去りにされようとしている。教育課程の中での特別活動の役割も十分議論されることなく，「望ましい人間関係の構築」「集団や社会の一員としての学校生活への参画」「文化や伝統を継承する事」などが書き込まれたが，「学ぶ意欲を育てる」などの具体的な教科活動との連動の在り方は指示されていない。

この間ますます社会の絆は緩み，家族という枠組みまで崩れつつあり，社会の回復力が失われている。その危機意識は学習指導要領全体の方向性の中には記されていない。社会の水漏れはこの国が60年にわたって進めてきた，欲望をそのまま肯定し，右肩上がりの経済を最優先する価値観が，飽和状態に達したために起きてきた現象であり，それを支えてきた効率や競争を優先させる教育の行き詰まりによってもたらされたのではないかと考えるが，「道徳教育重視」の視点だけでは現代的な問題への対応は不可能だと考える。教育の自由化と独自の教育理念に基づく実験的教育の推進の中から教育の新しい方向を模索していく作業が必要なのではないかと考える。

2.3　問われる私学の独自性

一連の教育改革をめぐって私立学校はどのような対応をしてきたか。先の改訂で導入された「総合的学習」は，私学の独自性を発揮するチャンスであった。総合的学習の時間を用いて独自の教育を展開した全国の私学もあったが[2]，形だけ総合的学習を導入した学校も少なくない。せっかく独自性を発揮できる枠組みがあったのに，実験的な教育を展開できなかったことは，今日の私学教育の問題だと言えよう。そのような中で，総合的学習は，十分な準備や現場での主体的な取り組みの積み重ねが見られないうちに，今回の学習指導要領では価値を失いつつある。

一方，私学の伝統や独自性は，特別活動の中に隠されていることが多い。事実，全国の学校で，特別活動を通して，その独自性を発揮している学校は今も多い。これに教育的意味を付与していくことは，今後大きな意味を持つものとなるであろう。この隠れたカリキュラムに光を当てて意味づけを明確にしていくことが，偏差値や学力のみを重視する教育課程の中にあって，学校の独自性を取り戻す重要な鍵を握っていると思われる。

3．キリスト教学校の独自性とは何か

3.1　建学の精神

もともと実験教育の場である私学の教育は，その時代の公立学校での目指した方向性とは異なる創立者の思いが凝縮された宣言文である「建学の精神」を持っている。ある場合は地域の必要性に応えるものとして，ある学校は私塾的目的意識を持って，ある学校は創立者の確固たる思想や信念を実現する場として，あえて日本の教育に一石を投じることで作られた結社として私学は作られた。キリスト教学校は，西欧文化の伝達とキリスト教教育を推進する場として設立された。

各私学において建学の精神に基づいた教育の実施は最重要課題であり，同時にそれを時代に合わ

せて「現代化」していくことは，学校の精神的柔軟性を測る尺度となる。創立者の精神は時代拘束性が強いため，「その精神を現代化していくこと」は私学存続の必要条件となっているが，普遍的な価値の実現を目指すキリスト教学校は，特定の時代精神に拘束されず時代を超える普遍的な価値が建学の土台となっているために，現在の教育活動とつながりやすい面を持っている。しかし，宗教とりわけキリスト教を背景とする学校の建学の精神は「両刃の剣」であって，緊張感を持って「本音と建前」「理想と現実」の間の溝を埋めていく作業が同時に進行していない限り，建学の精神は形骸化して実質を失うものになる危険性を孕んでいる。現実に絶えず目を止めていくことが，緊張感を持って建学の精神を具現化していくために必要な視点であるといえるだろう。

この点において，キリスト教学校がその生命力を保てるのは，「礼拝の場」に負っていることが大きい。学校礼拝が新鮮に実施されていることが，建学の精神を維持するためにも重要である。礼拝を軽視するとキリスト教学校は力を失う，それは過去においても現在においても未来においても真実である。

３.２　教育方針とカリキュラム

学校が掲げる教育方針とは，「建学の精神」の具体的な説明であり，学校が持っている教科課程（カリキュラム）は，教育方針を実現させるための方法である。このカリキュラム編成の独自性が学校の特色となっている。医師が自分の治療方針を患者に十分知らせた上で，その同意に基づいて治療行為を行うことをインフォームド・コンセントと呼ぶが，教育にも同様の同意が必要だ。教育の中身，教育の方向性をはっきりと提示して，その教育方針に共鳴した保護者がそれに同意して「教育」を託すことで，私学の教育は可能となる。そのためには，掲げている教育と実際の教育が一致していること，問題点や課題を含めた全てがオープンになっていること，保護者の協力を得て，学校がその教育目標を果たしていくことが，何よりも大切であるといえる。

キリスト教学校はこの意味においても極めて独自性の強い学校である。礼拝を持ち，聖書の時間を持ち，建学の精神に基づく独自のカリキュラムを編成している。入学以前から，特色をはっきりと打ち出して，理解した生徒と保護者に入学してもらうという姿勢が一貫している。教育の中身を十分に理解したうえで入学する生徒たちは，キリスト教教育を自然なものとして受け取ることが出来る。キリスト教の背景のない圧倒的多数の保護者たちも教育内容を理解した上で，生徒を入学させている。教育の中身に対する期待があるからであろう。それを裏切らないことが各校の責任であると言える。

３.３　隠れたカリキュラムとしての「校風」

全国の私学の空気に触れる機会を得て，各校を訪問するたびに感じるのは，私学には独自の味わい深い校風があるということだ。当事者は気づかぬものだが，その校風を作り出す「隠れたカリキュラム」を独自に持っていることの興味を持った。

地域から愛されている学校，長い伝統の中に作り出されている空気，学校改革に取り組んでいる雰囲気，生徒たち全体に見られるまとまり感など，おそらく無意識のうちに形作られている「隠れたカリキュラム」がどの学校にもあった。授業日数は，年間で150～180日，補習などを入れても200日前後だとすると，年間の半分は授業していないのが高等学校だ。授業以外の部分の隠れたカリキュラムがあると考えるほうが妥当だと思える。「校風」はそれが当たり前であるため，校内にいると気づかないものだ。しかしこの「校風」の中にこそ，私学の特徴が現れる。独自教育を標榜する私学は，その結実を空気の中に見られるものなのだ。

この点において，キリスト教学校は全国で共通の具体的で明確な「空気」を持っている。一歩校内に足を踏み入れた時にわかる「校風」が，いずれのキリスト教学校にも存在する。それだけ，日常的に建学の精神が伝えられているからであろうか，建物や学校の構えの中に歴史的な重みがある

からであろうか，生徒と教師で創り出している雰囲気が温かいものであるからであろうか，キリスト教学校の独自性は各校の中にはっきりと表れているように思われる。この空気の醸成には，礼拝を中心としたキリスト教学校独自の特別活動が大きく貢献しているといえるだろう。

4．特別活動を見直す

4.1　特別活動の基本的性格

学校教育における特別活動の基本的性格について，文科省は「中学校学習指導要領」「高等学校学習指導要領」のそれぞれの第5章「特別活動」（平成20年）の中で，特別活動の目標を以下のように同じように規定している。

「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，人間としての生き方についての自覚を深め，自己を生かす能力を養う。」[3,4]

学習指導要領の解説書に文科省は，この特別活動の目標について，中学校・高等学校の解説書で同じように「望ましい集団活動の展開と望ましい集団の育成」「個人的な資質の育成」「社会的な資質の育成」「自主的，実践的な態度の育成」「人間としての在り方生き方についての自覚と自己を生かす能力の育成」という五つの観点をあげ，これらを通して「生きる力を育むこと」を目指した教育活動を展開する事を目標としていることを明示した。

ここに記述されている特別活動の基本的な性格としては，第一に教科書の内容を教えるようなものではなく教師と生徒同士の人間的な交流を中心とする集団的教育活動である点，第二に人間関係の形成や調整を通して各人の個性を尊重する態度を養う教育活動である点，第三には「実行することを通して学習する」実践的な教育活動である点，すなわち自主的主体的に取り組むことを通して獲得していく教育活動であること，第四に社会の一員として生きていくための適応力と社会的関心を養う教育活動である点，第五に社会的連帯感や責任を身につけて，社会の一員としての判断力や行動量を養う活動である点，第六に各校の状況に応じて計画され実行される活動であり，生徒の実情に合わせて弾力的に運用される教育活動である点が指摘されている[5]。

今回の改訂で「人間関係を築く」という文言が加えられて，よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的・実践的態度の育成が目標として明記された。「関係性の構築」の重視は，今日の教育的な課題であるが，特別活動を通して集団や社会の一員として学校生活にかかわることの重要性を強調していることは，特質すべきことと言えよう[6]。

特別活動は従来から人間としての生き方についての自覚を深めて自己を生かす能力を養うという意味において，個人の資質向上が目標とされてきた。それゆえ，どのような人間になるかという「価値の問題」や「生き方の問題」を考えることを抜きにして，この目標を明確にすることはできない。この点において，特定の価値を掲げることの危険をはらんでいる公教育においては，目標が抽象的になりやすいが，キリスト教学校においては，特別活動を通して実現させるべき目標を提示しやすい環境にあると思われる。

本稿ではキリスト教学校の特別活動を通して実現される「人間としての生き方の自覚」を深める諸活動について考察し，その可能性について論じてみたい。

4.2　ホームルーム活動～魂の響きあう場

今回の高等学校学習指導要領の改訂では特別活動の目標が明確になると共に，ホームルーム活動，生徒会活動，学校行事の中身についても「目標」が明示され，どのような資質や能力を育成するのが明らかにされた。ホームルーム活動は，生徒の学校生活の土台となる場所の確保と結びつく活動である。学習指導要領では，目標を「望ましい人間関係の形成」「集団の一員としての生活づくり」「問題解決の向かう自主的，実践的態度の

育成」の三つをあげ，ホームルーム活動を重視することが掲げられている。

しかし現在の高校生を巡る社会状況は「集団への帰属意識」を実感して，集団として問題解決に向かうという学校生活の在り方から遠く離れたところにあるように思われる。エゴイズムとニヒリズムを容認する時代風潮は，生徒同士の関係性の構築を困難にし，「共に生活する場を共有しているクラス」という観念を持ちにくくさせている。

とりわけ，集団的な生活体験の乏しい高等学校の実態としては，クラスの一員としての自覚を持ちうるのは，「学校行事」において共通体験をすること以外に生まれにくくなっている。「学校の中の居場所」としてのクラスの比重は，時代の変化と共に希薄になってきている。ある公立高校では，昼休みに大多数の生徒が自分の携帯電話を手にとって学校外の知人にメールをしているという。この異様な静けさは，「目の前のクラスメイトより電話の向こうの知人に親和性を感じる高校生の姿」を写し出しているように思われる。クラスがクラスとして機能しなくなっている現実をそこに見ることができる。このような環境の中でのホームルームの時間は，深い関係性を求めるものになりにくい。事実，情報の伝達の時間に終わっていることが多い。

キリスト教学校においてホームルームは，喜怒哀楽を共有する同世代の人々の交流の場となることができる。それはホームルームの場を通して日常的に行われている，クラス礼拝や終礼の時間が設定されていることによる。毎日のクラス礼拝は，クラスメイトを信頼して自分の内面を告白しあうことの出来る場となっているからである。文字通り魂の響きあう場を日常的に体験することで，人間と人間の信頼感が構築されていく。安心して自分の内面を表出できる場が，毎日の積み重ねの中から形成されていくからである。

筆者の経験してきたキリスト教学校における「終礼」の時間は，一人一人の生徒たちの心に触れることの出来る豊かな時間となっていた。自分の心の内側に起こりつつあることをクラスメイトに伝えることにより，不安や期待，悲しみや喜びなどを分かち合う。祈ってもらいたいと申し出る。このような経験を中高六年間で毎日積み重ねることで，言葉が磨かれていく。信頼感が深まっていく。そのような経験を重ねることが出来た[7]。

このような関係性は宗教的な面だけでなく，クラス集団が「安心して自分を表現できる場」となっていることが必要であり，それは「互いに語り合い聞きあう」という二者関係の営みが繰り返されている友達関係が構築されていることが前提となっている[8]。このような友人関係は，競争し優位を争うライバル関係からはこの関係は生まれない。「喜び者と共に喜び，泣く者と共に泣く」[9]という互いに関わり合う関係が構築されているところに実現していく。キリスト教学校の教育では，特別活動を通してこのような人間観が実現していくことを目指しており，毎日のホームルーム活動を通して，自他を尊重できる人間の育成を目標とした関わりと続けることが出来ると考える。

4.3　自主的活動としての生徒会活動

生徒会活動の活性化は，特別活動が目指す「望ましい人間関係」「集団や社会の一員としての学校生活づくりへの参画」「自主的実践的態度の育成」という目的達成にとって，最も手応えのある有意義な方法だろう。このことを可能にするには，生徒による自主的，実践的な活動が円滑に行われるような他の特別活動との調整が必要だろう。また集団や社会，学校の一員としての自覚を日頃の教育活動を通して浸透させていることも大事であろう。学年を超えた連帯や関わりの日常化も必要なこととなるだろう。自分が周囲の人たちとつながっていることへの気づきと責任が日頃から確認されていることが必要なことだろう。とかく自主的活動は，方向性を失うと「無責任な個人の権利の主張」の場となりやすい。自律，義務，責任という負うべき役割を自覚させつつ，組織的な行動の持つダイナミズムを学ぶ機会になることを期待したい。

自主的活動を育成するには，生徒の発達段階を考慮することが大事であろう。複数の学年が混在する学校における自主的活動を組織化するには，

学年の違いと役割分担を明確に位置付けていくことが重要だ。上級生の責任制，下級生の意欲，生徒相互が連帯と一体感の形成など，自主的活動を通して学ばせる方向性を，学校全体が持っていることが重要であろう。

主体的に取り組むことは参加意欲を高め，責任意識を向上させる。中学高校の発達段階において，この自主性をどう育てるかは学校教育が抱えている大きな問題と言える。中高段階で自主的活動を通して育成されるのは，当事者意識と社会性であろう。主体的に物事に取り組んでいく経験は，「自尊感情」を育成して，居場所感を与え，責任と自覚させる。集団をより良いものにして行こうとする主体性は，本来特別活動が持っている「社会化」の目標を達成させていく。このように生徒会活動を通して自主性を養うことは，学校の活性化にとって重要な課題であろう。

この生徒会活動を活性化するためには，学校全体の考え方の一致と取り組みの姿勢が大事である。特別活動の重要な課題と位置付けて，教科活動やその他の特別活動と有機的に関連付けていること，そして何よりも，生徒をどう見るか，生徒の創り出す創造的な営みをどう評価していくかについて，教職員が共通理解を持っていることが重要である。とかく，「自主的活動」が「教師の思惑」の中だけに位置づけられて，生徒の創造的な行動が規制されている現実がある。学校は生徒たちの未熟さに配慮しつつも，自主的に行いたいと願う精神の若さと行動力を摘み取ってしまうことのないように心がけるべきであろう。

キリスト教学校において，伝統的に生徒会活動が活発に行われてきたのは，キリスト教教育が持つ人間観に原因があると思われる。その特徴は第一に，教師と生徒は立場や役割は異なっても，ひとりの人間としては対等の存在であり，それゆえに生徒の創造性を尊重する態度を教職員が持っていることであり，それが生徒の可能性を最大限に認めていく態度を生み出している。第二に，一人一人を大切にする人間観が前提として学校内にあることで，自他を尊重する気風が形成されやすいこと，そのため生徒も「自我の調整能力」[10]を身につけやすく，行動のコンセンサスがとりやすいことなどがあげられるだろう。第三に生徒たちが創りだそうとしている企画や行動が，教育を通して伝えられた価値観に基づいて考えだされ，隣人愛を基礎とする「他者のために役立つこと」が多いために，教師たちもそれを支援する共通の土俵を持っていて，一致して支援しやすいことがあげられよう。キリスト教学校が伝統的に取り組んできたボランティア活動はその具体例であり，国際的な交流，異なった文化や世代との交流，社会的弱者への支援などを，隣人愛の実践として各校の生徒会は行ってきたが，その取り組みが生徒会活動を活性化させてきたように思われる。

４.４　クラブ活動

生徒の自主的な活動のもう一つの柱はクラブ活動であり，中高の発達段階において，このクラブ活動を通して獲得される教育的な課題はきわめて大きい。学年やクラスを離れて，共通の興味や関心を持つ生徒によって組織されるクラブ活動は，生徒会活動の傘下に入る大事な自主的活動である。このクラブ活動に関する規定は，先の平成10年の改訂で小学校は継続されたものの，中学校，高等学校の「特別活動」の内容から削除された。中学校における必修クラブという理念は後退し，クラブ活動の持つ教育的意味が語られず，クラブ活動に学校生活における位置づけを非常に曖昧なものにしてしまっているように思われる。

新学習指導要領において，クラブ活動は，「課外活動」の一部として位置付けられ，中学校学習指導要領の中には，第１章総則の第４「指導計画作成等に当たって配慮すべき事項」(13)，高等学校学習指導要領の中には，第1章総則の第5款「教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」の（13）に，同じ文章で，

「生徒の自主的，自発的な参加により行われる部活動については，スポーツや文化及び科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養等に資するものであり，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるように留意すること。その際，地域や学校の実態に応じ，地域に

人々の協力，社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運用上の工夫を行うようにすること。」
と記されている。しかし，本来クラブ活動は，「特別活動」の一環であり，学校教育活動の中で重要な位置を占めている活動であろう。少なくとも，生徒の健全な精神の発達を考えた時，大きな意味を持つ働きと言えるだろう。

文部科学委員会調査室の関喜比古（2009）は，「学習指導要領に部活動と教育課程との関連が明記されたのは，初めてのことであるが，率直に言って，これは法的・制度的な問題点を解決しないままで部活動の強化策（いわば学校と地域社会への丸投げ）であり，文科省の姿勢は若干疑問なしとしない。このように，学習指導要領上のブレを始めとして，部活動に対する軸足が定まらないことは，学校現場に諸々の問題を引き起こしている。」[11]と指摘しているが，クラブ活動と特別活動の関連を明確にする必要はあるだろう。

キリスト教学校におけるクラブ活動には特別な独自性はないが，他の私学と同様一つの教育理念に基づく運営がなされている点において，一貫性を持っている。多くの場合，入部に際してクラブ活動の目的を，教育活動の一環として生徒及び保護者に明確に提示されている。

４.５　学校行事の意味

特別活動のうち最も継続的に実施されている活動は，「学校行事」であろう。学校行事には，（1）儀式的行事，（2）文化的行事，（3）健康安全・体育的行事，（4）旅行・集団宿泊的行事，（5）勤労・奉仕的行事があることが，学習指導要領に記載されている。これらを通して，「望ましい人間関係を形成し，集団への所属感や連帯感を深め，公共の精神を養い，協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的・実践的態度を育てること」を目標に行われている[12]。

これら一つ一つの学校行事は，その学校の伝統や校風を築いていく重要な教育的意味を有している。学校生活に節目を創る儀式的行事，文化祭や音楽会などの生徒の諸活動を発表する行事，学校全体の一体感を演出する体育的行事，多くの生徒たちにとって忘れられない思い出を刻む宿泊的行事，体験を通しての発見が多くある勤労的行事などを通して，連帯感や一体感，驚きや発見，充実感や感動を味わい，学校の一員であることを自覚し，自尊感情を高めていく。

長年続いている学校行事は，学校独自の意味を持って継続されているものであり，その意味を現在化していくことを通して学校の独自性は強まっていく。近年，行事が形式化して，生徒にとっても教職員にとっても意味のないものになってしまい，授業時間の確保のために廃止される傾向がある。しかし学校行事は，生徒の学校生活における一つの節目であり，共通体験の場であり，学校生活の重要な思い出の場であることを大事にする必要があるだろう。

行事の持つ意味を再発見することは大事なことだ。学校全体で行う体育祭や文化祭などの行事の特徴は，「伝統が引き継がれていく行事」だということであろう。学校の独自性が発揮されやすい。これらの行事の中に，長い間に培われていく「校風」の片鱗を見ることが出来る。それは，先輩から後輩に暗黙のうちに伝えられていくものである。従って学校全体の中で，生徒達が誇りと自覚を持って参加できるものにしていくことが，これらの行事を活性化していくために必要なことだといえよう。

筆者が特に重要と感じているのは，入学式や卒業式などの儀式的行事である。これは学校生活に節目をつける行事である。この生活にけじめをつける，節目を持つことは，生徒たちが育ちゆく文化の中でとても難しいものとなった。家庭から年中行事や通過儀礼も失われつつある。そのような中で，生徒たちに「節目という感覚を味わわせること」は，重要なことと思われる。それが成長の一つの契機になるからだ。

人間の成長には節目と発達の段階がある。生徒たちは，「変わろう」と思うことで変わることが出来る若さを持っており，その「場と機会」を提供することが重要だ。学年の節目などが，その最大のチャンスであろう。自分自身の経験からも，

4月の始業式を契機にガラッと変わっていく生徒が多いと思う。それまで，遅刻60回という生徒が，新学年を契機に自分を変えようとして，翌年は皆勤で通したり，不登校でカウンセリング室にいた生徒が4月を機に教室に戻ったり，新学年を契機に積極的になろうと思い，委員を引き受け，自分の可能性を一気に開花させ，自信を持って卒業していったり，4月が出発の節目になることが多くあった。

大事なのは，学校全体がその思いを支えていくことであり，その思いをサポートする体制や働きかけをすることであり，それゆえ儀式的行事は学校にとって大切なものだと思う。そこに，学校の独自性が色濃くでる場になると思われる。彼らの人生の節目の場に立ち会っているという感覚を持ちつつ，儀式的行事を実施することが学校に求められていると思わされている[13]。

キリスト教学校においては，一つ一つの行事は学校の独自性を発揮する大きな機会となっている。一つ一つの行事に意味と目標が明確になっており，それを達成するための道筋も積み重ねられている。とりわけボランティア活動は，重要な学校行事と位置付けられ，事前の学習，自主的な体験の多様性，事後の分かち合いのいずれもが，洗練された質の高い内容となっている事例が多い。

4.6　宗教的行事～キリスト教学校の特徴

キリスト教学校を特徴づけるのは，「宗教的行事」が年間を通して学校生活の中に組み込まれていることである。毎日の礼拝がその中心だが，それに加えて，クリスマス，イースターなどの特別礼拝，キャンプや修養会などの宿泊行事，講演会やコンサートなどの文化的行事，それに多くの学校の場合，儀式的行事も礼拝形式で行われるなど，建学の精神や教育方針を伝達する機会は多く設けられている。

これらの機会は，学校の独自性を発揮できる大きな機会となっているが，それはたえずマンネリ化の危機の中にある。価値が語られるとき，その価値が現実の生活の中で実現しているか，語る人の人格の中に深く浸透しているか，建前と本音に乖離はないかなどが問われている。その問いに蓋をすると宗教行事はたちどころに形骸化してしまい，生き生きとして生命力を失う。その危機をはらんでいることを心に留めつつ，キリスト教学校ならではの宗教行事に臨むことは大切なことだろう。

大切なものが人から人に伝えられてきた教育の歴史の中で，価値を育む教育をどう展開していくかは，今日キリスト教教育の最大の課題と言えるだろう。それはこの宗教行事を学校教育活動の中にどう位置付けていくかにかかっているように思われる。

5．特別教育活動を通して育むもの

5.1　自尊感情の育成

教育基本法の改正（2006年）を受けて改訂された教育課程に基づいて作成された学習指導要領は，「学力の重視」を目指した改革であった。本来，自尊感情が著しく低下してきた子どもたちの現状を見直して，「生きる力」を取り戻させるための改革は頓挫して，授業時間数の確保と学習内容の増加を意図した新しい教育課程にこの国は再び向かおうとしている。「特別活動の重視」は，そのような現状の中で，かろうじて子どもたちに自尊感情を育成する方法なのではないか。

学校が学力だけを重視する姿勢を取るならば，ごく少数の自己実現を図ることのできるものと，圧倒的多数の自己評価の低い子どもたちが輩出される。「どうせ自分なんて」という思いを持ち，気持ちが学校から離れてしまう子どもたちはますます増加するだろう。日本の教育の最大の問題は，中等教育の目的そのものが，ごく少数のエリートしか実現できない課題を中心において，大多数の子どもたちに幻滅を与え，それ以外の価値や生き方を提供できない点にある。「何のために学ぶのか」「生きる意味とは何か」を問わずに，知識の量だけを注入しようとしている教育のひずみが，いたるところに今見られる。

私たちは圧倒的に多く存在している自己評価の低い子どもたちも教育の対象とすべきである。彼

らにどう自尊感情を持たせられるかが「教育の課題」であろう。学校生活の中で「特別活動」が明確な位置を持ち，その活動を通して，自分と他者の自我の調整能力を発揮しつつ，主体的に学校生活にかかわれる場を提供することは，大事な教育的課題だ。学力の確保が強調されると同じ頻度で，生活の中に意味を見出して自尊感情を養っていくことは重要な課題であろう。

5.2　スクールアイデンティティの大切さ

特別活動の持つもう一つの意義は，「スクールアイデンティティ」をつくることだといえよう。生徒にとっての母校意識，自分の学校であるという認識，自分の居場所であるという自覚，「私がここにいる」という意識，これらの思いを形成するために，特別活動はとても重要である。それは生徒同士の体験の共有のときであり，学校の一員としての自覚の形成の場でもある。しかし，それは学校からのメッセージとして，一人ひとりが大事にされているという思いが伝わって初めて可能になるのであり，学校がそれぞれの活動を大事にしているとの発信をしていくこと，教師も生徒と体験を共有していく時に，それはさらに深まっていくことが出来るのである。

私学の独自性とは，生徒たちの持つ体験の独自性であり，その共通体験意識が「学校が発信している特色」を具体化していくことにつながっていく。教育の王道は目の前の生徒たちが自分と向き合い，学校全体に共有される目的意識から生まれてくるスクールアイデンティティの形成を目指すことではないか。学習においても，進路指導においても，生活指導においても，特別活動を通してでも，そのことは可能になると思われる。

5.3　魂のふるさとづくり

キリスト教学校の教師として実感するもう一つの生徒との交流は，生徒の魂と触れる関わりだろう。そのためには「私の意識を生徒に向けること」が大事だと考える。人と関わる職業の特徴は，心理学者のユングがシンクロニシティ（共時性）という言葉で説明した，出会いの体験を持つことだ。気にかけている生徒がいると，その子が近づいてくる。卒業生のことを気にしていると，本人から電話が来る。意識の方向が重なるという不思議をだれもが持つ。意識を向けなければ何も起こらない。これが人と関わる仕事の醍醐味だ。魂への関心を持つこと，それはキリスト教の言葉で「祈り」ということになるだろう。実存的な出会いはそこに起こるのだ。

キリスト教学校のもう一つの特徴は，卒業生たちにとっての帰る場所，戻ってくる場所があるということだ。卒業生たちにとって学校が故郷になる，魂の故郷になりうるといえることだ。私立学校は，物理的にも精神的にも学校が帰ることの出来る「母校」でありうる点に特徴がある。故郷とは，飾らない素直な自分がいた場所であるなら，卒業生に心の故郷を提供するのは，私学の特質を生かすことになるだろう。キリスト教学校は，単なる懐かしさだけではなく，魂の故郷になることが重要だ。魂が養われた場所として，人生のどんな時にも戻れる場所を提供することが，キリスト教学校の使命ではないだろうか。

6．終わりに

すべての学校には，独自の校風があり，それを作る隠れたカリキュラムがある。学校が独自性を更に発揮することを目指すのであるならば，その隠されたカリキュラムを検証し，今の生徒のためにそれを生かせるように工夫を重ねていくことが必要だろう。そしてそれは，正規の学習プログラムとともに，学校行事や生徒会活動，そしてホームルーム活動，クラブ活動などの特別活動の中に埋もれていることを多いことに気づき，それに意味づけをしていくことが必要なのではないか。

それは教育に携わる者たちが生徒と共に創り出していく創造的な営みの中に実現する。学校が元気を失わないためにも，独自性の主張を明確にしていく必要があるだろう。そのためにも，学校は生徒の健全な発達を支援する特別活動を重視して，生徒が生き生きとするために，教師がそれに寄り添うとともに，自信を持って教育的な営みを

続けることが必要だろう。特別活動は，関係性の学習である。教師と生徒で創り出す「共同体としての学校」建設は，この特別活動を重視することから始まるのではないだろうか。

参考文献（本文　注）

1　岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄（1999）「分数のできない大学生」 東洋経済新報社
2　水口　洋（2001）「特色ある私学の教育実践と学校運営に関する研究」 日本私学教育研究所調査資料228
3　文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説　特別活動編」 ぎょうせい
4　文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領解説　特別活動編」 海文堂出版
5　松下静男・羽生隆英・原清治（2002）「特別活動の理論と実践　改訂第三版」 学文社
6　原口盛次・今泉紀嘉・井田延夫・倉持博（2010）「特別活動研究　第三版」 教育出版
7　水口　洋（1996）「風と出会う」～ミッションスクールの教師として　いのちのことば社
8　榎本博明（2002）「＜ほんとうの自分＞のつくり方」 講談社現代新書
9　新約聖書　ローマの信徒への手紙　12章15節
10　須田　治（1999）「情緒がつぐむ発達」 新曜社
11　関喜比古（2009）「問われる部活動のあり方」～立法と調査294 国土国会図書館デジタル化資料2009070151.pdf
12　山口　満　編著（2009）「高等学校新学習指導要領の展開　特別活動編」 明治図書
13　水口　洋（2006）「教育を考えるあなたに」 いのちのことば社